

小特集

# イスラエルのパレスチナ人

## アラブ・マイノリティへの暴力の構造

### 編集にあたって

パレスチナとイスラエルとの間では暴力の応酬が続き、泥沼化している。イスラエルに住みイスラエル国籍をもつ「イスラエル・アラブ」にも深刻な影響を与えている。2000年9月28日に勃発したアル・アクサー・インティファダ（第二次パレスチナ民衆蜂起）がその分岐点になった。エルサレムやパレスチナ自治区に住むパレスチナ人たちは立ち上がり、イスラエルに住む「イスラエル・アラブ」も呼応してデモに参加して街頭に出た。ところが、イスラエル治安警察はイスラエルのアラブ市民に発砲し、18名が死亡した。この事件を機にイスラエルにおけるユダヤ人社会とアラブ社会の間には深い亀裂が入ったのである。

「イスラエル・アラブ」とはイスラエル建国後も難民とならずに故郷パレスチナに残った人々のことである。イスラエル建国直後の1949年には15万9000人に過ぎなかった。かれらはイスラエル国籍を付与され、イスラエル市民として生活している。にもかかわらず、1966年まではアラブ市民は軍政下に置かれ、軍からの許可がなければ自由に移動もできなかった。イスラエル市民としての権利はアラブ・マイノリティという治安上の理由で棚上げされてしまった。というのも、かれらはアラビア語を日常的に使用しているという意味ではアラブ世界の一部であり、敵国に内通する可能性のある潜在的な敵の「第五列」だからである。しかし、同時にユダヤ人とともに生活を送っているのでイスラエル国家の公用語であるヘブライ語をも習得している。イスラエルではアラビア語も公用語の一つであり、紙幣や切手などにはヘブライ語、アラビア語、英語が記されている。

もちろん、「イスラエル・アラブ」は一枚岩ではない。2001年末のイスラエル統計局の数字では、イスラエル全人口約640万9000人のうち、アラブは122万7500人で、そのうちムスリムは99万7000人、キリスト教徒は13万6000人、ドルーズ教徒が10万5000人である。ベドウィン、チェルケス人、アルメニア人といった人々も存在する。帰属意識はアラブだと公言できるほど必ずしも単純ではない。とりわけ、イスラエル国防軍への兵役の義務が免除されているアラブ市民とは違って、ドルーズ教徒、ベドウィン、チェルケス人には志願してイスラエル国防軍の兵士となる人が多数いるのもたしかである。

地理的にも、「イスラエル・アラブ」は、北部のナザレを中心とするガリラヤ地方、ウナム・アル・ファハムを中心とする小三角地帯と呼ばれる中央部、そしてベドウィンが住む南部のネゲヴ地方に分散して居住している。また、ハイファ、テル・アヴィヴ=ヤッフォ、ラムレなどの都市ではユダヤ人と混住している。

このところ、「イスラエル・アラブ」には自分のことをパレスチナ人とみなす人が増えている。「イスラエル・アラブ」はイスラエル政府によって貼り付けられた差別的なレッテルだと考え、パレスチナ自治区や離散したパレスチナ人とのつながりを重視して「イスラエルのパレスチナ人」とみなす人が増えているからである。とりわけ、第二次インティファダ以降、その傾向が顕著となってきている。

小特集「イスラエルのパレスチナ人」を企画したのは、以上のような状況を背景としている。9・11事件以降、ブッシュ米大統領は「対テロ戦争」の論理を前面に押し出し、アフガニスタンへの空爆を行ない、さらにイラクへの攻撃を行なっている。「対テロ戦争」の論理はとどまるどころをしらない。その最前線の一つがパレスチナとイスラエルとの間にあるともいえる。というのも、パレスチナにおけるハマースあるいはイスラーム・ジハードのようなイスラーム主義者が行なう自爆闘争がイスラエルおよびアメリカによって「テロ」と呼ばれ、イスラエル軍によるパレスチナ自治区への軍事攻撃が続けられる口実となってしまっている現状があるからである。イスラエルのパレスチナ人市民のなかにも確実にイスラーム主義者に同調する者が増えている。先にあげたウナム・アル・ファハムなどはその中心的なアラブ都市である。

この小特集における一本目の論考は、イスラエルでの民族的マイノリティのありようを独立宣言と基本法の視点から論じる。白杵は、ユダヤ人国家と民主国家という性格を同時に持つイスラエルでアラブ・マイノリティが生きる困難な状況をイスラエル国家の制度的枠のなかで明らかにする。次に、第二の論考は、ハイファに住むイスラエル市民のパレスチナ人であり、ベン・グリオン大学というイスラエルの公的高等研究機関で教鞭をとる政治学者でもあるアフマド・サアディー氏に寄稿してもらった。イスラエルのパレスチナ人から見た軍人・政治家としてのシャロン像が炙り出されていると同時に、イスラエル政府によるマイノリティに対する心理的・物理的な暴力のみならず、構造的な暴力をも明らかにする。イスラエルがユダヤ国家であろうとすれば必然的に出てこざるを得ない、非ユダヤ人を組織的に追放する「トランスファー（ヘブライ語では「ハアヴァラ」で、「運搬」の意味）」の思想の内在する問題性、国籍剝奪、民族的マイノリティへの脅迫など、「マイノリティ」と呼ばれる人々にとってもっとも深刻な政治的なイシューが分析される。最後に第三は、留学生としてハイファで1年8カ月を過ごした菅瀬晶子氏が低い目線から「イスラエル・アラブ」社会を分析している。「イスラエル・アラブ」の本音と建前、あるいは曖昧さや葛藤を、イスラエル・アラブ社会内部に入った外部の参加者の瑞々しい視点から描いている。イデオロギーで見えなくなる部分をも垣間見せてくれるエッセイである。

(国立民族学博物館地域研究企画交流センター教授 白杵陽)